

# 誌上ひとりワークショップ (後編)

## ～ 家族援助は街のアパレル～

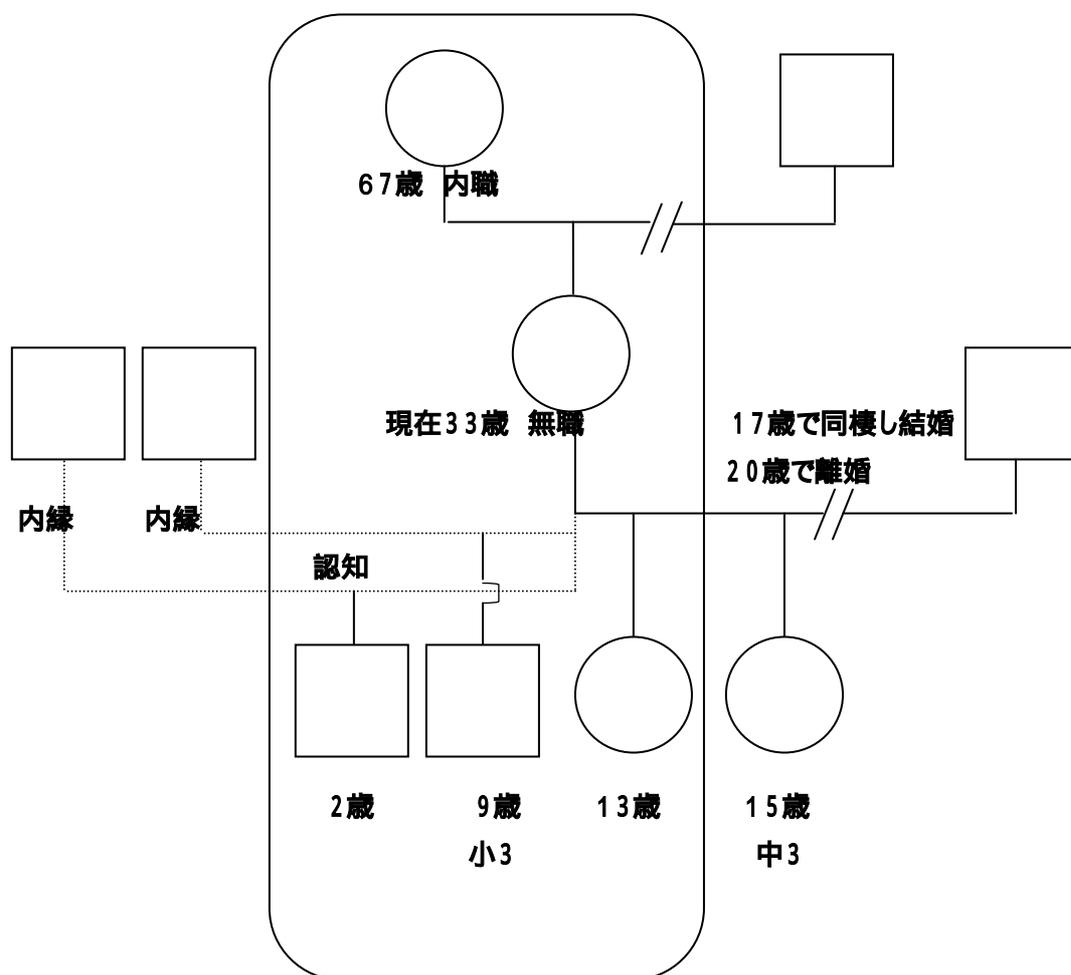
岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「誌上ひとりワークショップ」の第3回目です。前編はジェノグラムを通して「家族を読む」作業、中編は「家族を知る」作業でした。今回は、「家族を見立てる」手順をすすめていきます。

例によって、検討用に作成した事例の紹介からスタートさせていただきます。家族は数ヶ月前のままですから、読み飛ばしていただいてけっこうです。

演習事例の家族関係図(図1)



主役は、28歳の男性Aの部屋で、二人でシンナーを吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女児です。Aとは結婚の約束をしているといいます。本児はやせていておとなしく、影が薄い感じ。頭痛や不眠を訴えるも幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小1のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。妹を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通です。

翌年、母は二番目の男性と付き合いようになり、毎日足繁く通います。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしました。本児は、この男性が父親だと思っていたようです。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはありません。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったようです。やがて二番目の男性との間に男児が生まれるも認知してもらえず、男とは疎遠になりました。母は異父弟を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となり、小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。母はあいかわらずふらふらと家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。

母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする生活で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを極端に避け、母親が不在の夜には夜遅くまで徘徊しました。家出・リストカット・怠学等により、神奈川県の子童相談所に一時保護されこともあります。しかし、児童相談所ではほとんど胸の内を語っていません。このときは、母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて第4子(男児)を産みましたが、男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわらず母はふらふらと落ち着かず、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態です。なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっているようです。あるとき、本児が男性と別れてほしいと頼んだところ、「そんなことを言うならあなたの面倒見ない」と言われ諦めたとのことでした。

本児は弟たちにきつくあたることはしませんが、面倒を見ることもほとんどありません。それに対し次女は、言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたりますが、面倒はよくみます。次女には補導歴はありません。本児と次女の関係は悪く、いつもいがみあっています。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAとのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児と一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死を努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとしつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後、本児は初めて三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました。

## 7. 家族の問題理解・仮説を見立てる

「ここからいよいよ見立てに入ります。問題を理解して仮説を立てるのは援助者だけではありません。というより、家族の方が先に見立てています。それはとても貴重な情報となりますが、そう簡単には語ってくれるものではありません。

これまでの手順は、家族に見立てを披露してもらうためにも欠かせないプロセスでした。不安や怒りを受け止め解決努力をねぎらってくれたのだから、仮説だって真摯に受け止めてくれるはずと家族は期待するでしょう。そして、通り一遍ではない深い物語を打ち明けようという気持ちに傾いてくれるわけです、おそらく。

家族のよっては、問題の解決以上に自分の仮説への賛同を望んでいたりします。でも、こればかりは無条件に受け入れるわけにはいきません。なにしろ、問題の根幹をなしている部分ですから。

それは後の話として、まずみなさんに『本児は、いま起きていることをどのように理解しているか』を考えてもらいます。本児になったつもりで、この家で育ち、そこを出て、Aと生活するにいたった物語を組み立ててください。

(各班の意見を報告)

「はい、ありがとうございました。みんなで一緒にこの家族をみてきても、班によってずいぶん感じ方が違うんですね。この場で、あなたの人生はこんな風に何通りにも見えるんだって、彼女に聞かせてあげたい気がします。

さて、わたしは次のように見立てました。

**表7 本児の問題理解・仮説**

いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしても子どもを守るのが母親だと思う。自分の母は、ずっと好き放題をして生きてきた。あの人の心には、子どもは住んでいない。

母は好きじゃない。むしろ嫌い。けど、憎いのとは違う。そんなものかなって思うだけ。家族は愛し合うものと思うけど、うちは違う。自分は母みたいになりたくないから、家を出た。このままだと、母と同じになる気がして…。

Aといると、いろんなことを忘れられる。Aとはお互いに頼りあえる関係、こんなのは初めて。だから嫌われたくない、好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことがない。

Aとの関係は命がけで守るつもり。Aとのことは、自分がしっかりすることで乗り越えられる。こういうのが家族であり、人と人の付き合いだと思う。

間違わないでください、私にはそう見えるということであって、所詮、推測ですから」。

## 8. 家族の枠(人生観・信念)を感じ取る

「前にも言いましたが、わたしたちが“問題行動”と呼ぶものには、家族の解決努力という側面があります。今回のことだって、あきらかに逸脱的な行動で診断的には素行障害ということになるのだけど、本児にしてみれば『家族とはなにか、人を愛するとはどういうことか』を追求する営みです。

Aへの傾斜は家族から距離を置き、家族に変わる支えを求めた必然の結果であり、シンナーとの妥協はレイブ環境に比べたら比較にならない選択だったでしょう。こういった行動選択の背景には、本児が生きてきた枠組み・人生観が横たわっています。

この枠が面接で語られることは、めったにありません。わたしたち子どもの精神科領域では、特にそうです。枠は、基本的に援助者が感じ取るものだと思います。アンダーウェアですから、見せてくださいというものじゃない。

枠は人生観・社会観・生活信条などが混ざったものですが、総論が枠でさきほどの仮説が各論と考えればわかりやすいかもしれません。さて、彼女はどんな枠組みで生きているのか、そこを感じとりましょう。これは短くまとめたほうがいいですね。どうぞ、ゆっくり時間をかけて話し合ってください」。

「」。

(各班の報告を聴く)

「難しかったですか？先の問題理解・仮説以上に隠れていますからね。何度も言いますが、正解なんてわかりません。当の本人にさえ分からないかもしれない。私たちひとりひとりが、彼女のことをどう感じているか、そこに行き着くと思います。わたしは、次のように感じました」。

### 表8 本児の枠組み

母親は身勝手だし、兄弟はバラバラ。自分の家族は、家族とは言えない。そうである以上、家族をあてにせず自分が強くなって道を切り開いて生きるしかない。
--

「“家族をあてにできない”は家族への恨みや絶望ではなく、自分に言い聞かせる叱咤激励です。彼女の半生から導かれた、この年齢にしては途方もなく重い枠です。基本的に、援助者がどうこうできるものではないでしょう。ただ、もしいまここにある問題を納得のいく形で乗り越えるたら、その結果、背後の枠も変わる可能性はあると思います」。

## 9 仮説を置き換えて再構成する(図2)

「見立てが終わったら、いよいよ具体的な援助です。目の前にいる人が着用しているシャツ＝問題理解・仮説について、援助者なりのアイデアを出さねばなりません。新しいシャツをすすめるか、今着ているシャツを生かす方向でいくか、仕立屋の判断のしどころです。私は、『お客のシャツを新調するとしたらどんなデザインになるだろう』から入る医療モデル的なクセを持っています。

先ほども言いましたように、お客は愛着のある自分シャツを仕立屋が評価してくれるものと期待しています。そこに

シャツの新調をすすめられたら、強く抵抗するのは当然でしょう。その気持ちに整理をつるのは、仕立屋のセンス、援助者の専門性への信頼以外にありません。

こうした専門性をもった職種 of 末尾にはたいてい師・官・司といった文字が着いていて、診断・治療とか指導・教育を行います。彼らは、根拠を持って自分の考えを押し進めます。



ところが、われわれの領域には医療・教育のような目に見える専門性はありません。家族の物語の専門家は家族に他ならないからです。そこで、家族の仮説をこちらのものに置き換えるために、図2のような手順を踏みます。

まず家族の「 が問題」という仮説を受け入れず、「いいえ、わたしは問題は だと思います」と援助者の説を説明します。あわせて具体的に解決策を提案し、心理教育的に伝えます。もしそれらが家族の腑に落ちると、新しい解決策が実行に移されるというわけです。

そうなると家族の新しい相互作用が生まれ、家族システムは変化していきます。もしかしたら、家族の枠も変わるかもしれません。しかし、家族の腑に落ちなければなにも始まりません。

思うに、心の領域では仮説の多くは人間関係のもつれをもって組み立てられています。虐待や養育困難だったら親子の関係、離婚や別居であれば夫婦の関係、学校不適応なら教師や友人との関係、のように。この人間関係原因説は、信頼とか愛情といった情緒的かつ主観的で当事者にしか分からない要素からなっています。

自分にしか分からないと思っているところに別の説を提示するのですから、似た仮説での置き換えは難しいです。思いもよらないほうが、かえって腑に落ちやすい気がします。わたしはよく、「人間関係が原因」説を「コミュニケーションが原因」説に置き換えます。家族のコミュニケーションがうまくいってないから、結果として不信や誤解が生まれるのだという理屈です。

情緒的なものを排した目新しさと、明日を描くノウハウ満載の解決策をセットにします。そんなことなら自分にもできそう、そう思ってもらえたら大成功です。その際の言い回しを、表9にあげてみました。

## 表9 よく使う言い回し

『そのときは、どんなふうに言いましたか？』  
『もしまた同じようなことがあったとして、同じようなことを言ったらどうなるでしょうか？』  
『じゃあ、今までと違ってこんな言い方をしたらどうなるでしょう？』  
『試しに、私があなたに言ってみますね。どうです？どんな風に感じましたか？これまでと、どこが違っていましたか？』  
『次にチャンスがあったら、いまの言い方を試してみませんか？』  
『ほかにもこの種のツボがいろいろあるのですが、そういったコミュニケーション・スキルを学んでみませんか？』  
『あなたの力がアップすれば、相手も変わると思います。スキルアップって、伝染するんです』  
『さっそくやってみられたんですか。すごいですね、で、いかがでしたか？』  
『それは予想以上の変化です。なにか、ご自分で工夫されましたか？』

とりあえず試してみるノリがいいと思います」。

「そうだ、ちょっと各班でやってみましょうか。表9をみながら、本児と心理教育的なコミュニケーション・スキルに関するやりとりをちょっと経験してみてください。そして、実際の感想を話し合ってください」

(各班の報告を聴く)

「ちょうどいい時間になりましたね。では、今回はここで終わって、次回は本児と面接をしたらこんな感じかな、みたいな話から始めようと思います。」